2015 都民芸術フェスティバル参加公演

第四十五回 日本の四季Ⅲ

# 邦楽演奏会

平成27年3月7日［土］国立劇場小劇場

尺八　清元節　常磐津節　長唄　河東節　琵琶　一中節　新内節　義太夫節　箏曲

第一部◎開場11:00／開演12:00　第二部◎開場15:30／開演16:00　完全入れ替え制・全席自由

【主催】邦楽連合会
（一社）義太夫協会
清元協会
（一財）古曲会
新内協会
常磐津協会
（一社）長唄協会
（公社）日本三曲協会
【助成】東京都・（公財）東京都歴史文化財団
邦楽振興基金
【後援】（公財）日本伝統文化振興財団

# ご挨拶

本日は、二〇一五年都民芸術フェスティバル参加公演「邦楽演奏会」にお運びくださいましてありがとうございます。

昭和四十六年から続いておりますこの演奏会は、本年をもちまして四十五回を数えます。この催しは、多種の邦楽を一同に集めまして、義太夫協会、清元協会、古曲会、新内協会、常磐津協会、長唄協会、日本三曲協会という七つの団体（邦楽連合会）が力を合わせて、日本の伝統芸能をお聴かせする、他に例を見ない大変に意義のある鑑賞会と自負致しております。

本年は四十五回という節目を記念致しまして、例年通り日本の四季の風情を味わっていただく演目に加え、幕開けは尺八（第一部）、琵琶（第二部）の若手女流演奏家の舞台をご覧頂き、各部の終わりには義太夫・新内（第一部）、長唄・三曲（第二部）の掛け合い曲をお届け致します。また、曲と曲との間には、邦楽愛好家にはお馴染みの葛西聖司さん（元ＮＨＫエグゼクティブアナウンサー）の楽しいお話しで綴って頂くなど、皆様に、より邦楽に親しんで頂けますようにと思っております。

何かと不行き届きの点もあるかと存じますがお許しを頂きまして、どうかごゆっくりとご鑑賞下さいますようお願い申し上げます。

邦楽連合会 代表　萩岡松韻

# 第45回 邦楽演奏会 第一部 日本の四季Ⅲ

12時開演

幕開　尺八　鹿の遠音・鶴の巣籠吹合せ

春　清元節　喜撰

夏　常磐津節　夏船頭

長唄　巽八景

秋　河東節　乱髪夜編笠

冬　箏曲　冬の曲

掛合　義太夫節　新内節　関取千両幟

# 幕開

尺八　鹿の遠音・鶴の巣籠吹合せ

琴古流　金子朋沐枝
高須理恵
辻本好美
青木由貴

都山流　櫻井咲山
田辺道恵
樋口景山
井本蝶山

## 解説

### 鹿の遠音・鶴の巣籠吹合せ

「鹿の遠音」「鶴の巣籠」は、尺八本曲の中では、鳥獣の生態を曲目にした珍しいものであり、また擬音的効果音や、呼びかけ合うように重なり合う重奏法など、音楽的特長性に於いても特殊な位置を占めるものです。

「鹿の遠音」は、晩秋、深山幽谷に鹿の声がこだまする情景に楽想を発していると言われており、敢えて噪音を用いる「ムラ息」と呼ぶ擬音的効果音が痛烈な叫び声を表し、この曲に独特の緊張感を醸し出しています。

「鶴の巣籠」は、数多く同名異曲が認められますが、都山流の同曲は、鶴の生態をかりて親の慈愛を都山流独特の感覚的な表現方法を用いて編曲されたものです。

なお、今回の吹き合わせは、東京藝術大学創立百周年記念の定期演奏会の際に編まれたもので、この二曲に共通する隠れたテーマは、「鹿の遠音」に於いては夫婦の、「鶴の巣籠」に於いては親子の、我々にとって最も身近な人間関係の情愛となっています。



# 春

清元節　喜撰

浄瑠璃　清元延清恵
清元延志佐枝
清元延栄佳
清元美喜了

三味線　清元延志寿佳
清元香葉
清元延美雪
清元延亜希郎

**清元延清恵**（きよもと のぶきよえ）
東京都生まれ。東京藝術大学音楽学部（邦楽科別科）修了。昭和五十八年清元初栄太夫師に入門。同六十一年清元延清恵の名を許される。主に演奏会、舞踊公演などに出演。清元宗家高輪会理事。

**清元延志寿佳**（きよもと のぶしずよし）
東京都出身。昭和五十四年清元志寿朗に入門。東京芸術大学音楽学部邦楽科卒業。在学中は人間国宝、故清元栄三郎・清元梅吉・故清元志佐雄太夫に教えを受ける。昭和五十七年清元延志寿佳の名前を許され、歌舞伎座の「新春歌舞伎公演」に出演。昭和五十九年皇居内桃華楽堂「音楽大学卒業生演奏会」にて御前演奏。現在は演奏会、舞踊地方、ラジオ出演のほか、ワークショップ講師などを務める。清元協会及び清元宗家高輪会理事。

## 解説　喜撰

本名題「六歌仙容彩」

作詞・松本幸二　作曲・初代清元斎兵衛

初演・天保二年（一八三一）江戸中村座　中村芝翫（四代目中村歌右衛門）が、岩井粂三郎（六代目岩井半四郎）の小町をわき役として、一人で五役を踊り分けた五変化舞踊の一つです。

六歌仙の一人喜撰法師は橘諸兄の孫で、山城の宇治山の麓に住み仙人の生活をしていましたが、ある時雲に乗ってどこかへ去ったという伝説があります。

祇園の桜木を中心に、京の桜満開の山々を背景とし、桜の小枝をかたげた喜撰法師が茶汲女のお梶を相手にユーモラスな振りなどを見せて踊りぬいていると、寺から下っ端の坊さん達（お迎え坊主）が迎えに来て一緒に住吉踊りを踊ります。平安朝の高貴な六歌仙の一人に、江戸時代の俗な遊びをさせるところがこの曲の狙いとなっています。

## 詞章

〽我庵は芝居の辰巳常磐町　しかも浮世を離れ里　〽世辞で丸めて浮気でこねて　小町桜の眺めに飽かぬ　きゃつにうっかり眉毛を読まれ　〽法師ほうしはきつつきの　素見ぞめきで帰らりょか　わしはひょうたん　浮く身じゃけれど　〽主はなまずの取り所　ぬらりくらりと今日もまた　浮かれ浮かれて来たりける　〽もしやとみすを余所ながら　喜撰の花香茶の給仕　〽波立つ胸を押し撫でて　しまりなけれど鉢巻も　幾たびしめて水慣棹　〽濡れてみたさと手を取って　小野の夕立えにしの時雨　〽化粧の窓に手を組んで　どう見直して胴震い　〽今日の御見の初昔　〽悪所と聞いてこの胸がおぼろの月や　松の影　〽私やお前の政所　いつか果報もいちもりと　ほめられたさの身の願い　〽惚れ過ぎるほど　愚痴な気に　〽心の底の知れかねて　じれったいでは　ないかいな　〽粋と言われて浮いた同士　〽やれエエエ　色の世界に出家を遂げる　やれ〳〵〳〵細かにちょぼくれ

〽愚僧が住処は京の辰巳　世を宇治山とや人は言うなり

〽茶々くちゃ茶園の話す濃茶の　縁の橋姫　〽夕べの口説の袖の移り香　花たちばなの小島ヶ崎より　一散走り走って戻れば　〽朝日のお山　〽誰でも彼でも二世の契りは　平等院とやさりとはこれは　うるせえこんだに　〽奇妙頂礼　どら如来　〽ここに極まる楽しさよ　〽難波江の片葉の芦の　結ぼれかかり　〽よいやさ　これわいな　〽とけてほぐれてエエエエ　逢う事も　待つに甲斐ある　やんれ夏の雨　〽やぁとこせ　〽よいやな　〽ありゃりゃ　〽これわいな　〽このなんでもせ　〽姉さん　おんじょかえ　〽島田金谷は川の間　はたごはいつもお定まり　〽お泊りならば泊まらんせ　お風呂もどんどん沸いている　障子もこの頃張り替えて　〽畳もこの頃替えてある　お寝間のおとぎもまけにして　〽草鞋の紐に仇どけの　結んだ縁の一夜妻　〽来世は生を黒牡丹　おのが庵へ帰りゆく　我里さしてぞオオ　急ぎ行く

# 夏

## 常磐津節　夏船頭（なつせんどう）

浄瑠璃　常磐津和佐太夫
　　常磐津和英太夫
　　常磐津松希太夫
三味線　常磐津東蔵
　　常磐津菊与志郎
上調子　岸澤満佐志

**常磐津和佐太夫**（ときわづ わさたゆう）
一九三七年出生（一九三七年七月二十七日生）。一九五三年幼少の頃より父・常磐津菊兵衛に師事。一九五七年三代目常磐津真砂太夫を名乗る。一九六〇年NHK邦楽技能者教育育成会第六期卒業。一九七一年五代目常磐津和佐太夫を国立劇場にて襲名。一九九〇年常磐津協会理事就任。一九九六年常磐津協会創立五〇周年功労賞を受賞。重要無形文化財総合指定保持者認定。一九九七年「第八回和佐太夫の会」芸術祭優秀賞受賞。二〇〇五年常磐津協会常任理事就任。二〇〇七年秋の叙章「旭日双光章」受賞。二〇一四年常磐津協会理事長就任。一中節都和中、小唄芝小和佐、舞踊若柳和佐之助を許される。

**常磐津東蔵**（ときわづ とうぞう）
昭和九年東京生。同二十二年十六代目常磐津文字太夫入門。同三十六年NHK邦楽技能者育成会六期卒業。同三十九年NHK東京邦楽合奏団入団。同三十九年TBSテレビドラマ「連舞」テーマ音楽作曲、作曲活動開始。同五十二年「常磐津東蔵発表会」開催、以後継続中。同五十三年文化庁「舞台芸術創作奨励特別賞」。同五十五年文部省「芸術祭優秀賞」。平成八年重要無形文化財常磐津節（総合認定）。同十五年「日本文化紹介事業団」結成、以後外国公演十四回。



## 解説　夏船頭（なつせんどう）

天保十年（一八三九）三月に　江戸河原崎座で初演された、沢村訥升による大切所作事「四季眺い歳（しきのながめまるにいのとし）」と云う四変化の曲で、『行平』『船頭』『白拍子』『石橋』のうち、この船頭は夏の部なので、「夏船頭」と呼ばれています。また、雷が出てきて絡む所から「雷船頭」とも云われます。此の時代　船頭さんは人気の花形職業でした。

作詞三世並木五瓶・三升屋二三治。
浄瑠璃四世常磐津文字太夫、
作曲五世岸沢式佐。振り付け四世西川扇蔵。

## 詞章

（本調子）へ夜風山風富士風（よかぜやまかぜふじおろし）、筑波（つくば）ならいに両国の、眺め花火の賑いは、高尾、川一、吉野丸、屋台囃子に騒ぎ唄、心隅田の川続き。

船頭「もし旦那、お忘れ物でごぜえやす。もし、もし旦那。旦那はとうに行ってしまった。こりゃどうしたらよかろうな」

へほんに思えば泡沫（うたかた）の、阿波座鴉（あわざがらす）じゃなけんけれど、可愛い可愛いが身の詰まり、へ今じゃ浮世を水浅黄、向こう鉢巻向こう見ず、流れ渡りの気も軽く、粋（すい）な水道の勇み肌。

船頭「こりゃ一（ひと）しめり、降るかも知れねえ」

へ折から夕立稲光り、あたり見回すありさまは、恐ろしくもまた物凄き。（合方）妙だ〳〵〳〵〳〵〳〵、こいつあ妙だ、こいつあ妙だ、さてまた次の雷は、（合）雲と雨とに誘われて、ごろ〳〵、がら〳〵、ぴしゃりと下がり藤、へどなたもさようじや、（合）

船頭「ややややや、どっと降ったり。おや」

へ落っこちたなら亀戸（かめいど）で、この頃はやる、これ開帳へ、出してわっちは儲（もう）け口。へとかく浮世は色と欲、徳利引き受け手酌飲み、

次ページへ続く

（合方）〽その間に逃げる雷の、下帯取って、〽これ待った、なんじゃいな。

〽そもやお前と馴れ初めは、去年の文月文つけて、天の河原の夕涼み、〽夜の明けるまで、蚊に食われ、しっぽり濡れし夕立の、〽晴れて悔しき雲の内、つい乗りやすき叢雲は、あんまりつれない胴欲な、これなあ申し、笑い顔見せて下さんせ、心強やと 取りすがれば、〽わけは知らねど鬼の目に、ぐわ〳〵〳〵、涙催す花曇り。〽これじゃいかぬとまたぐい飲み、酒の機嫌で回る舌。〽回るものなら風見の鴉、（合）むすめ、娘糸繰る、庄屋が銜え煙管で野良回る、親父や焼き餅で気を回す、夜は鉄棒ええんええん、火の用心さっしゃりましょう。二階も回る茶碗酒、昼も吸いつく蛸女郎、酒落た世界じゃあるまいか。

（二上り）〽わしとお前はごろつき同士、あっちへごろごろ、こっちへごろりと、裸百貫脛一本、狼出れども猪出れども、竹槍一本ありゃ、なんのこたあね、そうじゃそうじゃそうじゃ、そじゃわいな。そこがお江戸の（合）水育ち、わけもなや。

（本調子）〽これも弥生のわざくれや、日和もよしや吉原へ、送る 太鼓の音に連れ、早や夕立のさっさっと、竹屋をさして、走りゆく。

# 夏 長唄 巽八景

唄　杵屋 東成
　　今藤 政貴

三味線　稀音家 六四郎
　　稀音家 一郎

**杵屋 東成**（きねや とうせい）
昭和二十四年、初代杵屋勝禄の長男として大阪に生まれる。幼少より父に師事。海外公演多く近年は歌舞伎のタテ唄を勤める。平成二十一年、七代目杵屋勝三郎家元の推挙により「東成」を百十余年振りに襲名。（一財）杵勝会 副理事長。温知會同人。

**稀音家 六四郎**（きねや ろくしろう）
昭和三十二年、四世稀音家六四郎の長男として東京に生まれる。昭和六十三年、五世稀音家六四郎を襲名。（一社）長唄協会理事。長唄研精会 三味線方代表。楽名会同人。

## 解説

### 巽八景（たつみはっけい）

天保九年（一八三八年）四月二十八日に、池田信濃守の屋敷で開曲された素の長唄です。作詞者は、二代目立川焉馬、作曲者は、十代目杵屋六左衛門です。歌詞は、当時遊里として全盛を極め吉原を凌ぐとまで言われた「深川」を近江八景になぞらえて綴っています。この「巽八景」では、「永代の帰帆」・「八幡の晩鐘」・「佃の落雁」・「仲町の夜雨」・「石場の暮雪」・「新地の晴嵐」・「洲崎の秋月」・「櫓下の夕照」の八景と、「深川七場所」と言われている、「深川仲町」・「大小の新地」・「裏表の櫓」・「裾継」・「新古石場」・「向土橋」・「土橋」、とを取り入れて構成されています。

作詞者の立川焉馬は二代目で、初代は烏亭焉馬で落語の中興の祖と言われました。歌詞の終わりに、「その一節を立川の、流れを筆に残しける」、と綴って、地名の「竪川」と自分の苗字の「立川」とを詠み込んでいます。

## 詞章

三下り

大江戸と　ならぬ昔の武蔵野の　尾花や招きよせたりし　恋と情の探川や　縁もながき永代の　帰帆はいきな送り船　その爪弾きの絃による　情に身さへ入相の　後朝ならぬ山鐘もごんと佃の辻占に　燃る炎の篝火や　せめて恨みて玉章を薄墨に書く雁の文字　女子の念も通し矢の　届いて今は張弱く　いつか二人が仲町に　こころをひかれ夜の雨　堅い石場の約束に　咄は積もる雪のくれ　解けて嬉しい胸の雲　吹拂ふたる晴嵐は　志んき新地ぢゃないかいな　洲崎の浦の波越さじと　誓いしことも有明の　月の桂の男気は　定めかねたる秋の空　だまされたさの眞實に　見おろされたる櫓下　うたがひ晴れし夕化粧　目許に照す紅の花　幾代契らん諸白髪浮名たつみの八景と　その一節を立川の　ながれを筆に残しける



# 秋

## 河東節　乱髪夜編笠（みだれがみよるのあみがさ）

浄瑠璃　山彦ちか子
山彦花葉
山彦ゆかり
山彦摩耶

三味線　山彦千子
山彦香里
山彦朋音

**山彦ちか子**（やまひこちかこ）

河東節十寸見会技芸副総代。昭和二十六年河東節の山彦やな子に入門し、三十一年山彦ちか子の名を許される。三十七年「十一代目團十郎襲名興行、助六由縁江戸桜」で浄瑠璃を語って、初出演。平成九年五月、勲五等宝冠章受章

**山彦千子**（やまひこせんこ）

河東節三味線方。人間国宝。昭和五十三年河東節の六世山彦河良に入門し、五十六年「助六由縁江戸桜」で初舞台。五十八年山彦千子の芸名をゆるされる。平成二十一年河東節三味線方として初めて人間国宝に認定される。

## 解説

# 乱髪夜編笠

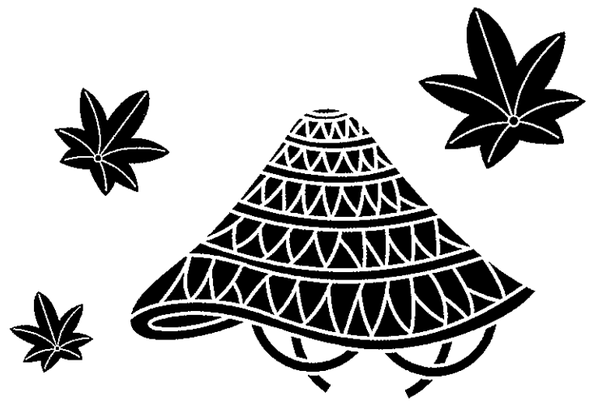
寛保二年（一七四二年）江戸中村座上演で初演されました。

三世　十寸見河東作曲

八百屋お七を題材とした芝居の中で唄われた曲で、言葉の運び方がテンポよく組み合わされている為、面白く聞こえ大変評判が良かったとの事です。個々の組替え歌の用にも聞こえて、編集をして唄を構成して唄われたりしました。また何処から始めても良く、様々な形での演奏が行なわれています。

二上りの「白さぎは～」から始まる事が多く、その際は（白さぎ）と副題を入れる事もあります。

また河東節の中では「助六」の次に多く歌舞伎で上演されていますが、戦後河東節での公演はまだ行われていません。





## 詞章

二上り〽白鷺は使いに来たかただ来たか、使いにも来ぬただも来ぬ、妻を尋ねて白浜越えて、逢うて戻れば千里も一里、あ逢はで戻ればまた千里、ほんにえ、えいえい、えいえいえい、さていかに、

（合）本調子〽引けば袂を振り切りて、昨夜の口舌今日の酒、うつらうつらと眠る蝶、菜種は蝶の花知らす、

（合）ああしやな、あれ、あれを見やむ虫さへも、

（合）露を命の置き所、命といふ字は誰が書いた、白無垢脱いで見せさんせ、あああんまりな面憎や、

（合）〽憎い憎いはいの裏よ、厭ぢゃ厭ぢゃはまたその裏よ、泣いて威すはそれ裏の裏、よいやなえ、

〽また打ち伏して泣く顔を、襟に包めば差し覗き、ともに涙のこぼるる萩は、

秋の花野を踏む足元も、

（合）〽忍ぶ人目の梳き油、解けて寝る夜の中絶えて、独り丸ね寝の油壷、誰が小枕の髪髷も、短夜ながら丈長に、思い廻せば明けかねる、

（合）〽その暁の払ひ、払へど袖に散りかかる、紅葉袋の鹿ならで、今は二人が憂き恋すれど、末の末の松山色変へぬ、万代かけて、万代かけて、やっさ。

三下り（合）〽そなた恋しさに七里が灘を、命や捨て貝来たものを、ほんにさ、

（合）〽離ればなれのあの雲見れば、の別れがし思はるる、ほんにさ、

（合）〽見れば見渡す、棹さしゃ届く、なぜに届かぬ我が思ひ、ほんにさ。

本調子〽消えて

（合）儚き花の塵塚、まどろむ宿とぞなりにけり。

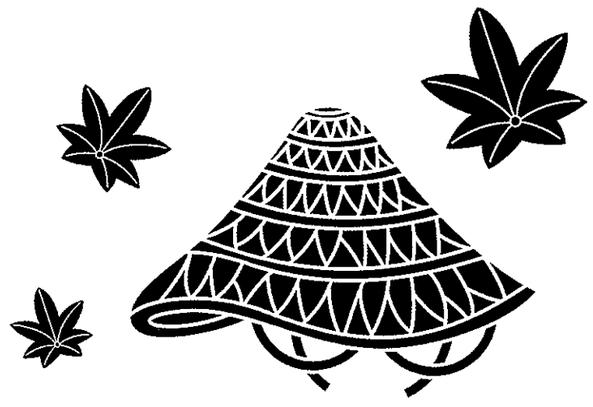
## 解説

# 乱髪夜編笠

寛保二年（一七四二年）江戸中村座上演で初演されました。
三世　十寸見河東作曲

八百屋お七を題材とした芝居の中で唄われた曲で、言葉の運び方がテンポよく組み合わされている為、面白く聞こえ大変評判が良かったとの事です。個々の組替え歌の用にも聞こえて、編集をして唄を構成して唄われたりしました。また何処から始めても良く、様々な形での演奏が行なわれています。二上りの「白さぎは～」から始まる事が多く、その際は（白さぎ）と副題を入れる事もあります。

また河東節の中では「助六」の次に多く歌舞伎で上演されていますが、戦後河東節での公演はまだ行われていません。





## 詞章

二上り〽白鷺は使いに来たかただ来たか、使いにも来ぬただも来ぬ、妻を尋ねて白浜越えて、逢うて戻れば千里も一里、あ逢はで戻ればまた千里、ほんにえ、えいえい、えいえいえい、さていかに、

（合）本調子〽引けば袂を振り切りて、昨夜の口舌今日の酒、うつらうつらと眠る蝶、菜種は蝶の花知らす、

（合）ああしやな、あれ、あれを見やむ虫さへも、

（合）露を命の置き所、命といふ字は誰が書いた、白無垢脱いで見せさんせ、あああんまりな面憎や、

（合）〽憎い憎いはいの裏よ、厭ぢゃ厭ぢゃはまたその裏よ、泣いて威すはそれ裏の裏、よいやなえ、

〽また打ち伏して泣く顔を、襟に包めば差し覗き、ともに涙のこぼるる萩は、

秋の花野を踏む足元も、

（合）〽忍ぶ人目の梳き油、解けて寝る夜の中絶えて、独り丸ね寝の油壷、誰が小枕の髪髷も、短夜ながら丈長に、思い廻せば明けかねる、

（合）〽その暁の払ひ、払へど袖に散りかかる、紅葉袋の鹿ならで、今は二人が憂き恋すれど、末の末の松山色変へぬ、万代かけて、万代かけて、やっさ。

三下り（合）〽そなた恋しさに七里が灘を、命や捨て貝来たものを、ほんにさ、

（合）〽離ればなれのあの雲見れば、の別れがし思はるる、ほんにさ、

（合）〽見れば見渡す、棹さしゃ届く、なぜに届かぬ我が思ひ、ほんにさ。

本調子〽消えて

（合）儚き花の塵塚、まどろむ宿とぞなりにけり。

# 冬

## 箏曲　冬の曲（ふゆのきょく）

箏本手
牧瀬 裕理子
大浦 美紀子
松島 里枝
佐野 奈三江
藤木 豊乃
岩城 弘子
吉澤 昌江
野澤 潤子
長谷川 愛子
矢﨑 明子
砂崎 知子
榑松 志保美
新宮 順子
上條 妙子
村田 章子
多々良 香保里

箏替手
牧瀬 裕理子
大浦 美紀子
松島 里枝
佐野 奈三江
藤木 豊乃
岩城 弘子
吉澤 昌江
野澤 潤子
長谷川 愛子
矢﨑 明子
砂崎 知子
榑松 志保美
新宮 順子
上條 妙子
村田 章子
多々良 香保里

**牧瀬 裕理子**（まきせ ゆりこ）
昭和二十七年宮城道雄に入門、引き続き宮城喜代子・数江に師事。昭和三十四年から阿部桂子師に三絃を習う。昭和四十年東京藝術大学邦楽科卒業、同大学院修了。宮城宗家、日本三曲協会理事、生田流協会理事、宮城道雄記念館理事、宮城合奏団主宰。



### 解説　冬の曲（ふゆのきょく）

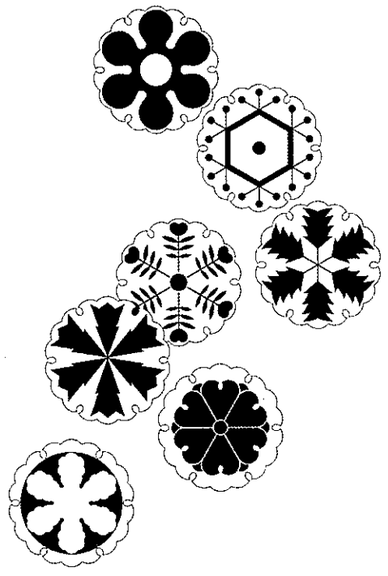
二世吉沢検校（一八〇八年／一八〇一年～一八七二年）が作曲しました。歌詞は、『古今和歌集』冬の部から和歌四首を選んで、初冬から晩冬へと配したもので、《春の曲》、《夏の曲》、《秋の曲》とともに「古今組」と呼ばれています。調弦は吉沢検校が雅楽の箏の調弦をヒントに考案した古今調子です。また、長い前弾きは雅楽の《陪臚》にヒントを得たとされています。

明治二十年代になって、松阪春栄（一八五四年～一九二〇年）が手事と替手を補作しましたが、それによって手事物として広く演奏されるようになりました。

現在、生田流でも山田流でも演奏され、また、追善曲としても演奏されることがある名曲です。

### 詞章

竜田川錦おりかく神無月
しぐれの雨をたてぬきにして
白雪の所もわかず降りしけば
巌にも咲く花とこそ見れ
み吉野の山の白雪ふみわけて
入りにし人のおとづれもせぬ
きのふと言ひけふと暮らして飛鳥川
流れてはやき月日なりけり



# 掛合

## 義太夫節・新内節　関取千両幟（せきとりせんりょうのぼり）

新内　浄瑠璃　鶴賀若狭掾（〈人間国宝〉）
三味線　新内仲三郎（〈人間国宝〉）
上調子　鶴賀伊勢一郎

義太夫　浄瑠璃　竹本駒之助（〈人間国宝〉）
竹本土佐恵
三味線　鶴澤津賀寿

**鶴賀若狭掾**（つるがわかさのじょう）
新内協会理事長。鶴賀流十一代目家元。新内節重要無形文化財保持者（個人）。新宿区名誉区民。平成二十一年度文化庁文化交流使。旭日小授賞を授与。新内伝承継承の為、日本各地はもとより海外四十ケ国で演奏。英語新内、新作多数。

**新内仲三郎**（しんないなかさぶろう）
冨士元派六代目家元。昭和五十九年冨士元派六代目家元歌舞伎座にて襲名。平成五年芸術選奨文部大臣賞。平成十三年新内節三味線の重要無形文化財保持者。平成十三年日・中・韓による「BeSeTo」演劇祭に日本代表として出演。平成十五年紫綬褒章。

**竹本駒之助**（たけもとこまのすけ）
昭和二十四年竹本春駒に入門。四十五年四世竹本越路大夫の門人となる。平成十一年人間国宝に認定。十五年紫綬褒章受章、二十年旭日小綬章受章。二十四年神奈川文化賞受賞。（一社）義太夫協会理事。

**鶴澤津賀寿**（つるざわつがじゅ）
竹本駒之助に入門、三味線を四代目野澤錦糸に師事。昭和六十一年初舞台。平成二十一年義太夫節保存会会員。八年芸術選奨文部大臣賞新人賞、十一年ビクター財団賞奨励賞受賞。（一社）義太夫協会理事。



## 解説

### 関取千両幟（せきとりせんりょうのぼり）

義太夫節：近松半二・竹本三郎兵衛・三好松洛　竹田文吉
竹田小出雲　八民兵七　合作
明和四年（一七六七年）大阪竹本座初演
新内節：二世鶴賀鶴吉作（同名の義太夫節より改作したもの）

若旦那　礼三郎が遊女錦木を身請けするのに二百両の金が不足していました。礼三郎がひいきにする力士猪名川は、今日中に金が工面できないと恋敵が錦木を身請けすると聞いて、恋敵の力士鉄ケ嶽にわざと負けて身請けを引き伸ばして貰おうと決心しますが、勝負の最中に「二百両進上ひいきより」の声がかかり、猪名川は鉄ケ嶽を倒します。この金は実は猪名川の女房おとわが身を売って用意した金だったのです。

本日は場所入り前の猪名川宅にて、猪名川と鉄ケ嶽とのやりとり（喧嘩場）から女房おとわの口説きまでを演奏いたします。

## 詞章

〽見えにける
町中の贔屓に肩も猪名川が　〽鐵ケ嶽陀多右衛門（てつがだけだだえもん）とうち連れ
帰る我家の内
女房「オオ　こちの人　戻らしゃんしたか　オオ　これはマア
陀多右衛門様　ようようおいで初日からまだ　お目にかかりませぬが　きつい大入りで御目でとうござんす
鉄ケ嶽「アイ　そりゃもう　互でござんす　見物の足が早さにそろそろ　行こうと出かけた道で稲川に逢うたによってそれで一寸寄りました
女房「それはマアマアよう出いで　したがまだようようと今の先　櫓太鼓を打ち出しました　マアゆるりとお茶なり
〽ト　会釈に汲み出す花香より心の花香ぞあいそあり
猪名川「コリャ女房ども　留守の内へ今日の相撲割りはこなんだか
女房「イエイエ　まだ何にも持っては
猪名川「ハテ埒のあかぬ　今迄知れぬは何ぞもめでもあるかい
ノウ　陀多右衛門
鉄ケ嶽「サア俺も初日に鈍な相撲を取ったによって何でも今日

次ページへ続く

はと思うているが、ハテ誰と合わすぞい相手によっては　魂胆も工夫もしてみにゃならぬ　いっそ行って聞いて来ようかい

女房「ハテマアよござんす　その内には持って来う　幸い貰うた肴もある　主と一緒に飯あがって行かしゃんせ　どうりゃへこしらえようと　木綿襷（ゆうだすき）かけまく神にあらねども菩薩廻りの女房は勝手へ立って入りにけり

大坂屋「稲川様お宿にござりますか　新町の大坂屋から参りました　佐右衛門申します　錦木太夫が身請けの後金　今日中に遣わされませぬと　こちらに身請けの客衆がござります故その方へ相談致しますがお前のお顔を立てまして今日中は待ちます　明日になったら　こちらへ太夫をやりますほどにその時に意路無路のない様に念を入れいと申されました

ヘト　云い捨て使いは立ち帰る

猪名川「ヤアその身請け他へさして　この猪名川が立つものかヘト　駆け出すを

鉄ケ嶽「コリャ稲川待て　その身請けの訳もその客もこの鉄ケ嶽がよう知っているほどに　マ行かずともよいわい

猪名川「ムすりゃその身請けの相談を我がよう知っているかシテその身請けの客と云うは

鉄ケ嶽「イヤほかでもない　俺じゃ　オオこの鉄ケ嶽陀多右衛門じゃほどに　マアそう思うてもらおうかい

ヘ俄に骨気もふしくれ立ち　頬鬚なでて　のさばり面

猪名川「ム　聞こえた　コリャ九平太が腰じゃな　もっともわれが為には大事にかけにゃならぬ人じゃが　ここをよう聞いてたも　アノ錦木太夫は俺が親方礼三殿とは　モきつう深い仲じゃ　その錦木ゆえ勘当まで受けられた事　コリャモウ云わいでもわが身　よう知っていやる事じゃ　そこはマア取ってほって　五百両という金まで渡し　後金の二百両才覚するその内に　太夫殿を他の手へ渡してはどうもおれが顔が立たぬ　わが身が中へ入ったこそ幸い　どうぞそっちの身請けをじゃみす様に云いまわしてはたもるまいか　ヤコレ鉄ケ嶽頼む頼む

鉄ケ嶽「オオ　この身請けはどうしようとこうしようと俺がままじゃ　われが頼む様にしてやろと云うたら勝手がよかろうがマいやじゃ　わりゃ　恵海庵で九平太様をひどい目に合わしたげな　オオ　強いこっちゃ強いこっちゃえ　その仕返しを頼まれているこの鉄ケ嶽わんぱくせい事いうない

猪名川「ムすりゃその時の事が根葉になって　それ故身請けの邪魔するのか

鉄ケ嶽「ヤイヤイ邪魔するとは何のこっちゃ邪魔するとは何のっ



ちゃい錦木が見受は金づくじゃぞよ　僅か二百両ばかりの後金で団子が喉へつまった様に　ぎちかわぎちかわと吠え面かくとは違う　七百両と云う金をがらりに投げ出し　それで身請けをするのじゃい

猪名川「なるほど　もっとも　モ兎角めいめい親方を大事に思うから起こる事じゃがなんと　こうしてはたもるまいか　どうぞ俺を九平太様へ連れて行て　彼方（あなた）の胸の晴れる様に　ぶたしなりと　また踏ましなりとさして　身請けはこっちへさしてたも　モわが身の云やる通り　金づくの事なれば　今日中に後金さえ出来れば　頼む事も何もなけれどそう急には出来にくい　もっとも在所へ云うてやったら　工面の出来る事もあろうが　親どもの耳へは入れとむない　それでわが身を頼むのじゃ　又せっかく身請けしやってからが太夫が九平太様の女房にゃならぬ　スリャコレ畢竟（ひっきょう）が費（つい）えと云うものじゃ

鉄ケ嶽「黙れ　黙れ黙れ黙りゃがれ　太夫が従うが従うまいがそんな事は構わぬ九平太様には金がたんとあるによってその金でわいらが面をはってはって張り廻すのじゃい

猪名川「サイノ　金で面を張らずとも　この猪名川をどうなりと腹のいるようにして　どうぞ身請けをさしてたも　一生の頼みじゃ　恩にもきよう　コレ手を下げる鉄ケ嶽

鉄ケ嶽「ムそんなら何か踏まれてもぶたれても云い分ないと云うのか

猪名川「イヤモ聞き分けてさえたもれば　たとえこの身はどうなっても

鉄ケ嶽「ウムこりゃ　相談が面白いワイ　九平太様の妙台にマ一寸こうしようかい

ヘト　足蹴にドワッと踏みとばし

鉄ケ嶽「何じゃ何じゃ何じゃ　何をびこびこするのじゃ　わりゃたった今云い分ないと云うたぞよ但しゃなんぞ云い分があるかい

猪名川「イヤモ　何の云い分があるもので

鉄ケ嶽「あるまいあるまい何の云い分があろうぞい　恵海庵での意趣返しわりゃ九平太様をヤこうくらわしたか　ヤこう踏んだかこうこうこう

ヘト　弱みに付け込む厄病の髪も頭も引きしゃなぐり　さいなむ折から表へ息せき

呼び出し「ハイ　今日の相撲割りで御座ります　モウ追付け土俵入りじゃほどに　早うお出でなされませ

ヘト　書附抛り込み立ち帰れば　ヘ陀多右衛門押し開き

次ページへ続く

鉄ケ嶽「何じゃ、鐵ヶ嶽と猪名川
猪名川「ムウ　すりゃ今日の相撲は
鉄ケ嶽「猪名川　コレ見い　俺と我との相撲じゃとよ
猪名川「ム　時も時
鉄ケ嶽「折も折
猪名川「わがみと
鉄ケ嶽「俺とが立合とはハテ気味合いことじゃな　コリャ我も池田の猪名川と言うては　国々へ名の通った者　俺も又大名のお抱え殊に大阪は初めてなれば、この相撲しくじるが最後扶持放れじゃ　スリャこれ二人ながら大事な相撲　九平太様の名代に恵海庵の仕返しをしたれば　コノ算用は済んである　又錦木が身請けの事は俺次第　オオこの鐵ヶ嶽が心のままじゃ　水心あれば魚心あり　マ頼む事も頼まれる事も今日の相撲しもうてからの事にしようわい　我も随分と　神仏でも叩き廻して　俺に勝つようにせい　したが可愛や　俺と取ったら骨身が砕けて重ねて土俵踏むことはならぬぞよ　どうぞ頭取衆を頼んで振り替えてもろうてなりと取らぬ方がマ勝じゃろうで　それとも又取ってみようと思うなら　ナア魚心あれば水心　猪名川　土俵で会おう
へト　強い言葉もどこやらに　味な金棒引き摺るせったがらつかせてぞ　出でて行く
へ跡に猪名川諸手を組み　思案に暮れていたりしが
猪名川「段々日限れの切れた後金。親方が催促するも九平太がみ所為　モとかく鉄ケ嶽を抱き込んで　あっちの身請けを延ばしてもらうよりほかはない　と云うて　ひと筋縄ではいかぬ奴　抱き込む仕様は　ム　太夫が身請けは俺次第『魚心あれば水心あり』ム　コリャ今日の相撲を　振ってやらざなるまいわいの　ソレソレ　あれと俺とが立ち合うこそ幸い　美しう振ってやり　あいつに勝ちを譲っておいて　その上で退つ引きさせず　頼むが近道上分別　とはいえ名取の鉄ケ嶽どう魂胆してなりとも　投げねばならぬ晴れの相撲　云わば一生懸命の　大事の相撲を金故に　振ってやる猪名川が心の内の切なさ穢さ　摩利支天にも見放され相撲冥加に尽きたるか
へト　思わず拳を握りしめ　身を震わして男泣き
へ始終立ち聞く女房が涙隠して
女房「申し猪名川殿　色も蒼ざめ　そして目のうちもうるんで　どうやら気色の悪そうな顔つきモ　今日の相撲へは断り云うて行かしゃんすな
猪名川「何をあんだら　つくすぞい　いつはともあれ　今日の相撲　鉄ケ嶽とこの猪名川　初日の出ぬ先から　町中がまっている晴れの出合い何でも鉄ケ嶽を土俵の砂へ埋まにゃおかぬ
女房「いやいや　そりゃ嘘じゃ　今日の相撲は鉄ケ嶽に振ってやるお前の心
猪名川「コリャ声が高い　すりゃさっきにからの様子残らず
女房「アイ　一間で聞いておりました僅かな金に手詰まって難儀さしゃんすが　私や悲しい　いっそこの訳　親父様へ
猪名川「たわけめが　それ言う程ならこのように　人に叩かれ踏まれはせぬわい　昔気質の親父様　打ち明けてもの言うと礼三様に意見の何のとやかましい　若いお人の水の出端若し命生害になった時はナ　コリャ　千日に刈った萱じゃわい
アァ急な事でさえなくば　工面の仕様もあろうのに　僅か二百両の金故に大事の相撲を振ってやらざなるまいかと思えば　不甲斐無いやら口惜しいやらで　俺ゃこの胸が裂けるような　裂けるような
女房「オオ　道理でござんす　道理じゃ　道理じゃ　へ相撲取を夫に持てば　江戸長崎国々へ行かしゃんした其後の　留守は尚更　女気の　一人くよくよ物案じ恨み涙に時移る
へ早や　おいおいの呼び使い
呼び使い「申し申し土俵入りでござりまする　早うおいでなされませ　チャットチャット
へ是非も
猪名川「女房どもいてくるぞや
女房「そんならもう行かしゃんすか
猪名川「鉄ケ嶽を抱っこんで工面通りゆきゃ格別
女房「もしも行かねば
猪名川「絶対絶命
女房「シェー
猪名川「これが暇乞いになろうもしれぬ　さらば
へトばかり一声をあとに残して出でてゆく
へコレ待って猪名川殿　たった一言云いたいことと見れども後は　雲かすみ
女房「コリャこうしてはいられぬところ　夫の命に　かかわる勝負
へわしもこれから相撲場へと　帯引きしめて夫の後　慕うてこそは

# 第45回 邦楽演奏会 第二部

## 日本の四季Ⅲ

16時開演

幕開　琵琶　春の宴（はるのうたげ）

冬　義太夫節　烏帽子折芋源氏（えぼしおりみばえげんじ）「伏見里の段（ふしみのさとのだん）」

春　一中節　都見物左衛門（みやこけんぶつざえもん）

夏　新内節　若木仇名草（わかきのあだなぐさ）（蘭蝶（らんちょう））

秋　常磐津節　恨葛露濡衣（うらみくずつゆにぬれぎぬ）（久八意見（きゅうはちいけん））

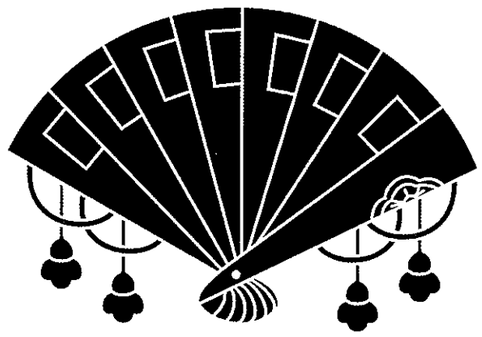
秋　清元節　田舎源氏（いなかげんじ）

掛合　長唄三曲　新松竹梅（しんしょうちくばい）

# 幕開

琵琶　春の宴（はるのうたげ）

鶴田流　首藤 久美子
熊田 かほり
榎本 百香





## 解説

### 春の宴（はるのうたげ）

原田謙嗣作詞／鶴田錦史作曲

昭和三十八年に作曲され、同年、東京銀座ガスホールで初演されました。

本曲は『源氏物語』の「胡蝶の巻」の冒頭部分から抜粋改編して詞章としたものです。内容は、光源氏が春たけなわの宴に、予て造らせて置いた舟を、紫の上の御殿の池に漕ぎ出させ、舟楽を奏でさせる、更に夜には宮廷楽士とともに管弦合奏などをして一夜を楽しく遊び明かす、という宮廷生活の一風景を描いたものです。

悲劇的題材を扱うことの多い薩摩琵琶歌としては珍しく、優美典雅な内容になっており、節付け弾法ともにそれに即して工夫され、華やいだ趣の曲となっています。この曲の発表以前にはなかった琵琶の合奏形式の可能性を追求した作品で、拍節的なリズムが多用され、器楽的色彩の濃い曲となっています。初演では、洋楽合奏団と鼓、コーラスをバックに指揮者付きで演奏され、琵琶楽のまったく新しい試みとして大反響を呼び起こしました。

## 詞章

三月二十日あまりの頃　紫の上の御殿の御有様
匂い尽して　咲きいでし花の色
鳥の声さえうっとりと　今たけなわの春景色

源氏の君は　かねて造らせ置かれたる
龍頭鷁首の船を　唐風に飾らせ
広き池の中へ　漕ぎ出ださせ給う

春の池や　井出の川瀬に通うらん　岸の山吹　底も匂える

間もなく夜となれば　お前の庭に　かがり火をとぼし
御橋の下の苔の上に楽人を召し
おん琴などいと華やかに弾き給う

遊び明かし　歌い明かし　呂の調べより
律の調べに移り　歌うて尽きぬ夢心地
春の宴の　夜もすがら

# 冬

## 義太夫節　烏帽子折茅源氏「伏見里の段」

浄瑠璃　竹本 綾之助
三味線　鶴澤 津賀花

竹本 綾之助（たけもと あやのすけ）
三代目竹本綾之助に入門、竹本綾一となる。NHK邦楽育成会第十期卒業。平成十四年四代目竹本綾之助襲名。十二年義太夫節保存会会員。二十三年旭日双光章受章。

鶴澤 津賀花（つるざわ つがはな）
平成十年竹本駒之助に入門。十三年初舞台。十八年文化庁新進芸術家国内研修員として六世鶴澤燕三に師事。二十一年日本伝統文化振興財団「邦楽技能者オーディション」合格。二十三年清栄会奨励賞受賞。



### 解説

### 烏帽子折茅源氏「伏見里の段」

近松門左衛門作。初演元禄三年（一六九〇年）大坂竹本座初演（推定）。長らく絶えていましたが、その中の一部、常磐御前と今若・乙若・牛若の三兄弟の逃避行を「伏見里の段」として三世野澤喜左衛門が復曲。物語の全体は義経伝説が元となっており、長じて奥州藤原氏の庇護を求めて東国へと旅立つ牛若が、元服を迎え烏帽子をつけ装束を改め義経となることから「烏帽子折り」という言葉が外題に使われています。能や幸若舞にも同様の「烏帽子折り」の演目があります。

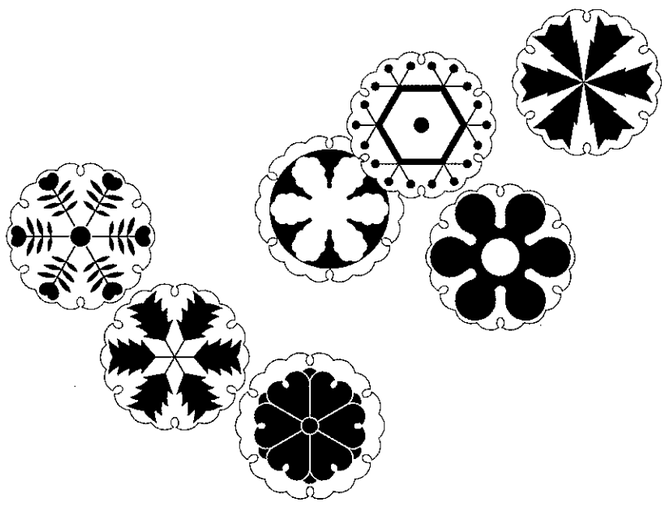
「伏見里の段」は、降りしきる雪の中、平家の追手を逃れる常磐御前と三人の幼子の苦難と親子の情愛が描かれています。

### 詞章

降る雪の音聞くほどに静かなり。竹よりおくの一つ庵、猫の通路跡付けし、只一筋の道細く、油火ほのかに掻立て女の業かしどけなき引ささ紙を結びつぎ、半上たる伊豫簾伏見の里の片邊り女主の軒さびて問う人稀なる折からに、御悼しや常盤御前、平家に世をばせばめられ、牛若君を懐に抱きかゝへ参らせて、ならはぬ歩路踏迷ひ、今若君も乙若も東絡げ脛巾しめ草鞋凍り足こゞへ覚へず知らずとぼとぼたどりたどりて車道ここにも人の墨染や桜の寺の晩鐘に、宿はからねど里の名は伏見に行くれ給ひける。常盤も今は力なく先へも行れず後へとては戻られず、頼みの綱も切果て詮方尽ておはせしが、漸心取直し只此上は運に任せて兎も角も今宵は爰に明さんと少し風避軒蔭に、小袖の褄の上がいを敷寝の床と片敷せ、笠を屏風のひぢまくら昔は翠帳紅閨に、隙間の風も寒かりし身はならはしと身を捨てて兄弟に降る雪を打払ひ打払ひ憐吊ふ小夜千鳥、泣々其夜を更さるゝ、間なく隙なく心なく、雪は溢すが如くにて、寒風颯々と烈しくて、人の肌骨に染渡り肌を刺す事鋭き刃の如くにて、悼しや母上は労れたる身を寒

次ページへ続く

気に破られ、悪寒五体を苦めばア、堪がたやと伏轉び前後不覚に見へ給う。今若乙若驚きてノウ悲しや母上様と、額を押へなで擦り、いかに乙若母上の寒からんに物着せまさん尤と兄弟帯解き身狭なる。小袖を脱で母上の裾や枕に取重ね打重ね、我は厭はで埋もるゝ雪の裸身哀れなる。母は苦き枕を上げ、ア、悼しの子供やな、斯ばかり母を大切にいかに孝行なればとて、和御前達を凍へさせ、親の冥加に尽るぞとよ、風邪ばし引な衣着よと着すれば脱で母に着せ、いや我々は寒からず、侍のならひにて如何なる雪にも戦して、能き敵に引組時、寒し冷たしなんどとて、敵に背を見すべきか、乙若も寒いと言ふな兄上寒いと覚すなと甲斐甲斐しげに言ふ声に、牛若目醒這出て見るを見真似に衣を脱ぎ、同く母に着せまいらせ、手足も慄ひ凍ゆれども、其色見せず歯切し、拳を握り耐ゆる躯、母は気も絶え目も眩み、情なや浅間しや、百萬餘騎の大将軍とも仰るべき若共に、一重の衣を着せかぬるは、可憐の有様や、御身達が志綾錦より厚ければ、母は着ねども温なり。可愛の者やこち寄れと三人一所に掻寄せて、抱き伏してぞ泣給ふ道理とこそ聞へけれ。





# 春

## 一中節　都見物左衛門

浄瑠璃　都一せつ
都一まり
都一延
三味線　都一のぶ
都一さき
都一志朗

**都一せつ**（みやこいちせつ）
重要無形文化財一中節保持者（総合指定）に認定。古曲会顧問。昭和三十五年十一世都一中に入門。昭和三十六年都一せつの名を許される。古曲演奏会、邦楽鑑賞会等に出演。

**都一のぶ**（みやこいちのぶ）
重要無形文化財一中節保持者（総合指定）に認定。昭和四十三年十一世都一中に入門。昭和四十四年都一のぶの名を許される。古曲演奏会、邦楽鑑賞会等に出演。

## 解説

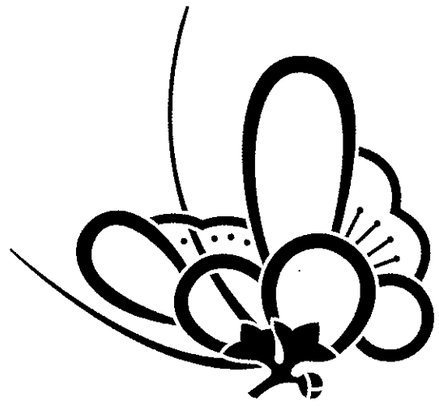
# 都見物左衛門

享保十一年江戸市村座にて二世都一中が作曲出演されたもので、浄瑠璃二世都一中、都千中、三味線が都千弥で演奏され大変好評を得ました。

旅人が京の名所を見物する様を書いたものですが、京の名物や京の風俗なども詠まれています。なお同じ題名で狂言も演じられていますが一中節を真似たものです。

昔、都見物の田舎者を都の人が「あれは見物左衛門だ」と馬鹿にした風がありましたので題名に使われたのだと思われます。

「咲いた桜になぜ駒つなぐ」という当時の流行り歌を取り入れ古格を保ちつつ華やいだ曲調が楽しめます。





## 詞章

調、シテ〽五色の外に色と言ふ、五色の外に色と言ふ、ものは手染めの情なり。

調、〽斯様に候ふ者は、洛中第一の果報者、東西南北の分け里を、毎日見物左衛門とは我等です。親無し子無し商売なし、世話なし苦なし他愛なし。世界は広し我が庵は、都の辰巳耳塚の、京へは遠き聾谷、聞かぬが仏大仏殿。扨々大きなお仏様、承れば彼の鼻の穴から、から傘さして出らるる由、そうもござらう。彼の仏様を生せられたお袋様の腰の廻り、検地の程が思ひやられました。扨又彼の両の手の大きさで、成ろう事なら銭が百、締めて貰ひ度い。真に仏を拝んでから、思わぬ欲が起りました。

二上り、浄瑠璃〽まづ彼れをば御覧ぜよ。彼の門前に隠れなき、日本一の大仏餅、大仏煙管様々に、羅宇の数は　シテ〽三万ワキ〽三千　ワキ〽三百　ワキ〽三十　ツレ〽三本なり。

東に見えしは清水寺、地主の桜や音羽の滝。心優か（八坂）の当世女、作り眉墨　鼻泣き、簾仄めく奥座敷。麓に花の真葛が原。登れば石の階橋も、角の取れたるナオス、〽丸山や。祇園香煎筒守、船の見合いの揖と呼ぶ。名にこそ立てれ二軒茶屋、かるたは笹屋布袋屋の、身を粉に砕く道喜の粽。

シテ〽咲いたや桜に何故駒繋ぐ、駒がな勇めば花が散るとな。

合、ワキ〽勇めば駒が駒がな、勇めば花が散るとな。

若水男若恵比寿、万歳楽とぞ囃しける。

合、三下り〽年若やかなる御万歳と、御代も栄え在します、愛敬ありける新玉の、年立ちかへる朝より、美面も若やぎ器量も一際上がりけるは、真に目出度う候ける。

往昔の女郎はぼんじゃりと、中頃は張り強く、今の女郎と申するは、万吉野の花紅葉、松梅囲ひ局まで、ナオス、〽色品姿の派手競べ、変わらぬ中の友白髪、尉と姥とは高砂や、相生の松尾上の鐘、金持大尽福大尽、福寿海圓万々年、国民繁昌千秋楽、万々歳とぞ祝しける。

# 夏

## 新内節　若木仇名草（蘭蝶）

浄瑠璃　富士松 鶴千代
三味線　新内 勝一朗
上調子　新内 勝志壽

**富士松 鶴千代**（ふじまつつるちよ）
昭和三十九年歌舞伎座出語公演。昭和四十六年三越劇場初独演会。昭和五十年新橋演舞場独演会。昭和五十三年パリ、海外公演。昭和五十六年家元襲名披露歌舞伎座公演。三越四十三年間独演会。平成二十六年国立劇場八十八回目公演。

**新内 勝一朗**（しんない かついちろう）
新内節勝新派家元、新内協会理事。
祖父・富士松志賀三郎、父・新内勝一朗。
六歳より父に指導を受け、昭和四十六年新内勝次朗の名を許され、平成二年新内誠十朗と改名。平成十三年二世新内勝一朗を襲名。平成二十年(財)清栄会奨励賞を受賞。



### 解説

**若木仇名草（蘭蝶）**

初代鶴賀若狭掾の作曲による新内節の代表曲。通称「蘭蝶」と呼ばれ、全曲約一時間。

声色師・男芸者である市川屋蘭蝶は、榊屋の遊女「此糸」になじみ、商売もせず女房「お宮」が身を売った金まで入れ上げてしまいます。思い余ったお宮は此糸に会い心の中を切々と訴えて蘭蝶との縁切りを頼みます。此糸はお宮の心情を汲んでその願いを承知してお宮を返します。隣の部屋でこれを聞いていた蘭蝶は、此糸が死ぬ覚悟であることを見抜いて、お宮の願いも空しく、蘭蝶と此糸は心中します。「縁でこそあれ末かけて……以下お宮のクドキは新内節の基本曲であり代表的曲節です。

### 詞章

〽蛾々たる玉顔紅粉を粧う
願わくは軽羅となって細腰につかん　願わくは明鏡となって
嬌面を分たん　雲となり　雨となる　楚王の恋　比翼連理は
洞底の　驪山の夜半の私事　漢の武帝の傾城や　街賣女色と
説くからに　佛の国も店国も　固い言葉は表向き　〽名にし
おう隅田にそいし　流れの身　名に流れたる桜川　蘭蝶とい
う鳥ならで　いつも塒と通い来る　跡に二人は拗ね合いの
果てしなければ蘭蝶は　物も云わず　ずっと立つを　此糸は
引きとめて
此糸「コリャ　何処へ行きなんす
蘭蝶「何処へ行こうとお構いなさんな　俺が身体で俺が足で
　向こうへでも隣へでも　好きなところへ行きやす
〽ト　また立ち上るを　引き戻し
此糸「ホンニあんまり虫がようありんすにえ
蘭蝶「アイ　お前に似てさ　下腹に毛虫のない　恐ろしい蛇
ムカデ　呑まれぬうちにモウ帰る　女房が松虫　さっぱり縁

次ページへ続く

をキリギリス　あのここなしょにんのげぢげぢめ　紙に包んでおとと来い

へト　あっちへいねむし　へいなごいなごと蹴散らかす　身振りは中車　高麗屋　市川流の口説なり　へ此糸は恨めしげに　男の顔を打ちまもり

此糸「お前のそうした癇癪はいつもの癖とは云いながら　あんまり邪慳な心意気　今更云うも　すぎし秋　へ四ツ谷で始めて逢うた時　好いたらしいと思うたが　因果な縁の糸車

へ暖簾押しあけ　此糸は

此糸「さぞ　お淋しゅうござんしたろ

へト　そばに言いよれば

お宮「アイ　お前には　お客が来たそうなが　蘭蝶　というお人かえ

此糸「アイ　イイエ

お宮「そりゃ　誰さんでもかまわぬが　これ此糸さん　お前なあ　お顔に似合わぬ　おそろしい　恨めしい　お人じゃなこう云うたら　あの女子は気違いか　とっけもないこと　云うと　思わんしょうが　私はの　こなさんの　お深間　蘭蝶が　女房の　宮でござんす

此糸「シェー　あの　お前が

お宮「さぞ　びっくりさんしたろうが　私が今日来たのはさだめし逢うて存分云うかと　思わんしょうが　そこをずっと　とってのけて　折り入っての相談　とっくりと　聞いてくださんせや　大方　主の話で何もかも　聞かんして知りぬいて　いさんしょうが

へ云わねばいとどせきかかる　胸の涙のやるかたなさ

お宮「アノ蘭蝶殿と夫婦の成り立ち　話せば長い高輪で　一ツうちに互いに出居衆

へ縁でこそあれ末かけて　約束かため身をかため　世帯かためて落ち着いて　アア嬉しやと思うたはほんに一日あらばこそ　商売事は上の空　贔屓で呼んでくださんす

お宮「馴染みのお客　茶屋衆も　来る度ごとに　愛想つかされへ嬉しかろうか　よかろうか　腹が立つやら悔しいやら　喰いつきたいほど思うたは今日まで　日には幾たびか　その恨みをも打ち捨てて互いの為の心底ばなし



# 秋

## 常磐津節　恨葛露濡衣（久八意見）

浄瑠璃　常磐津文字太夫
常磐津小文字太夫
常磐津千寿太夫

三味線　常磐津八百二
岸澤式松

上調子　常磐津祐二郎

**常磐津文字太夫**（ときわづ　もじたゆう）
昭和二十二年生。青山学院大卒。昭和三十四年初舞台。平成三年十七世家元継承。平成六年九代目文字太夫襲名。常磐津協会会長。常磐津節保存会会長。海外歌舞伎公演出演多数。

**常磐津八百二**（ときわづ　やおじ）
昭和二十四年生まれ。昭和四十三年初代常磐津松寿に入門。昭和四十四年十月常磐津八百二を名のる。昭和四十五年イノホールで初舞台。昭和四十六年十月歌舞伎座初舞台。昭和六十三年十二月歌舞伎座本興業にて立三味線。平成七年清栄会奨励賞。平成八年常磐津協会功労賞。平成二十年常磐津節保存会会員。常磐津協会理事。八百寿会主宰

## 解説

# 恨葛露濡衣（久八意見）

文久二年（一八六二）八月に　江戸守田座で書卸された「勧善懲悪覗機関」、又の名題「村井長庵巧破傘」の中の道行浄瑠璃です。

伊勢屋の養子千太郎、吉原・丁字屋の小夜衣の二人で　足抜けをしますが、小夜衣は連れ戻されてしまいます。今日の演奏はこの後の場面です。自害しようとする千太郎。思い止めようとする忠義者の番頭久八。揉み合う内に・・・

何時の時代にも　優柔不断な二枚目がもてる様ですね。

作詞河竹新七（後の黙阿弥）作曲は岸沢古式部。

## 詞章

へ又一と吹の小夜風に　雨雲運ぶ秋の空　かはる習ひの男気も　変らぬ忠義久八が　只一筋に歩み来て

久　八「宵に土手で若旦那を　見かけた故に跡をつけ　仲の町まで往て見れば　女郎が先へ待って居て　うつゝ他愛もない有様　すぐに踏み込みご意見せうとは思うたが　満座の中で若いお方に恥をかゝすも本意ならねば　帰りを待って此の土堤を　宵から幾度往ったり来たり　只さへ長い秋の夜に待たるゝ身より待つ身の譬へ　今打ったのはアリャ八つかしらぬ」

へ小川にかかる橋の名の　神ならぬ身にそれぞとも　知らで蹟く縁のはし

久　八「是は〳〵　何れのお方で御座りまする　真っ平御免下さりませ」「ハテナア　この往来に今時分　寝て居らるゝは生酔か　ヤ　息づかひの塩梅は　どうやら病に苦しむ様子　モシどうぞなされましたか」

へ雲間を出づる月の影

久　八「ヤア若旦那でござりますか」



千太郎「コレ　小夜衣は遣らぬ〳〵」

久　八「モシ気を確りとお持ちなされませ」

千太郎「ヤ　さう云ふ声は」

久　八「久八で御座ります」

千太郎「エ、　オゝそなたは久八　アゝ面目ない」

へ面目なやと逃出だすを　引戻してつれづれと　涙持つ目に顔うち見やり

久　八「モシ若旦那　この久八の顔を見て　逃げる様なお身持には　何でおなりなされました」

千太郎「エゝ」

久　八「エゝお前様はなア」

久　八「今更云ふに及ばねど　お前様は私がお世話申して御養子に　お出でなされし御身故　一方ならず思へばこそ　五十両の短刀も　此身に罪を引受けて　十二の年から勤めたる　お内を不首尾に出ましたも　悪いお名を附けまい為　伊勢五の内の番頭は　見かけによらぬ不埒者　紙屑買うて」

へあるくのは　心柄ぢゃと人様に　芥のやうに云はるゝとも

久　八「お前さまさへ御辛抱にて　御家督相続なさるれば　尽せし　忠義も現はれて　又元々の主従に　なられませうと夫れのみを　朝夕願ふ甲斐も々々　コレ此の様なお身持では　あの物堅いお内故　明日とも知れず御離縁に　おなりなさるは知れたこと　さうなる時は富沢町の御両親様へ私が　何と言訳がなりませう　何ぼお若いお心でも　よもや再び廓へは　お出でなされぬ事とのみ　思ひましたは田舎気質　正直過ぎたが今での後悔　ようも騙して下さりましたな」

千太郎「其の恨みは尤もぢゃが　さら〳〵騙すの偽るのと　そんな心は微塵もない　色に迷ひし若気の誤り　久八そなたへ言訳この場に於て」

へ差したる一腰抜くより早く　既にかうよと見えければ

久　八「エゝ滅相なことなされますな　お前様に命を捨てさせ　この久八が悦びませうか　誠のお人にしたいばっかり　夜の目も寝ずにまご〳〵と　蚊にせゝられて此の土堤を　幾度歩くか知れませぬ　今お前様に死なれたら　是まで尽した忠義も水　短気な事して下さりますな」

千太郎「それじゃと云うて　生きて居られぬ　この手を放してくりゃいの」

久　八「イエ〳〵滅多に放しは致しませぬ」

へとめる途端に久八が　持ったる刄過って

次ページへ続く

久　八「モシ　若旦那　どうぞなされましたか」
千太郎「イヤ〳〵　案じるな　どうもしはせぬ〳〵」
久　八「ヤ　五音の調子　呼吸の狂ひはコレヤ過って若旦那を
ヤ、、、、」
〽呆れて膝はわな〳〵と　目もくれなゐの草紅葉
久　八「モシ若旦那　お気を確かにお持ちなされませ　あなた
にお怪我をさせまいと　止める途端にあやまって　ひょんな
事を致しました　コリャどうしたらよからうナ」
〽苦しむ手負を介抱なし
千太郎「ア、　イヤ〳〵　其方の知った事ではない　もとより
死ぬる覚悟と言ひ　我と我手に突いた創」
久　八「イエ〳〵　あなたぢゃ御座りませぬ　此の久八が止
める拍子に　突いたので御座ります」
千太郎「まだ〳〵　そんなことを言ふか　先非を悔いて自殺す
る身の言訳を親達へ」
〽言ふ息さへも絶え〳〵に　冥土を照らす常燈の　燈火も消
ゆる
夜半の露　果敢なく息は絶えにけり
久　八「モシ若旦那　千太郎様いなう　コリャもうことが切れ
たか　ホ、、、」
〽野末に弱る秋の虫　哀れを告ぐる道哲の　鉦鼓の声も澄み
渡る
〽南無阿弥陀　々々々々々　々々々々々
久　八「忠義一図に凝固まり　怪我とは云へどお主を殺し　今
は不忠となったる此の久八　これよりお上へ訴へ出で　三尺
高く木の空で　主殺しの御成敗　受けて死ぬのが罪滅ぼし
　モシ若旦那　遅かれ早かれ私も　跡より冥土へ参りまして
この身の御詫を致しまする　有るか無いかは知らねども　三
途とやらの川端で　お待ちなされて下さりませ」
〽今は詮方亡骸へ　手向の水も宵の雨　木々の雫も袖濡れて
　唱うる六字の無常音　南無阿弥陀仏〳〵
〽小蔭に窺ふ以前の三治
三　次「うぬ　人殺しめ」
久　八「エ、」
〽罪科重き久八が　心の鬼に責められて　今の地獄の苦しみ
と　問註所さして急ぎ行く



# 秋

## 清元節　田舎源氏（いなかげんじ）

浄瑠璃　清元 梅寿太夫
　　清元 清美太夫
　　清元 國恵太夫
　　清元 成美太夫
三味線　清元 菊輔
　　清元 美三郎
　　清元 美十郎

**清元 梅寿太夫**（きよもとうめじゅたゆう）
清元登志寿太夫の長男として生まれる。昭和四十三年父と、叔母清元梅子に清元を師事。同年、従兄である四世清元梅吉師より清元成美太夫の名を許される。平成十一年二世清元梅寿太夫を襲名し、二世清元紫葉と共に国立劇場にて襲名リサイタルを開催。平成十二年財団法人清栄会「奨励賞」受賞。舞踊会、演奏会、放送、稽古などで活動。小唄、田村梅寿。清元美成会主宰。清元協会理事、清元流理事、清元節保存会会員。

**清元 菊輔**（きよもと きくすけ）
昭和五十年父である清元寿國太夫に入門し、昭和五十二年に二代目清元国太郎を襲名。同年十二月、歌舞伎座「大川橋蔵公演」の「道行雪の故郷」で初舞台。五十七年アメリカ歌舞伎公演に参加。平成元年二月六代目清元菊輔を襲名。五年七月中座「流星」で初めて歌舞伎の立三味線をつとめる。平成十七年財団法人清栄会「奨励賞」受賞。歌舞伎のほか、舞踊会、演奏会、TV、ラジオ出演のほか各地にて後進の指導にあたる。清元宗家高輪会理事、清元節保存会会員。小唄、二世田村寿国。

## 解説

# 田舎源氏（いなかげんじ）

本名題「田舎源氏露東雲（いなかげんじつゆのしのめ）」
作詞：三世桜田治助　作曲：名見崎友治
初演：もとは富本として嘉永四年（一八五一）江戸市村座で出されましたが、慶応三年（一八六七）江戸森田座で清元として初演されました。

柳亭種彦の草双紙「偽紫田舎源氏（にせむらさきいなかげんじ）」を通し狂言にしたなかの「古寺の場」です。足利光氏は東雲の娘黄昏のもとに通っていましたが、山名宗全に頼まれた東雲が光氏の命を狙っているのを知り二人で逃げます。光氏達は途中夕立にあい、真念の住む古寺に一夜の宿を借りますが、まだまだ藪蚊の多い秋の夜、真念はいぶしを求め二人を残して出かけます。そこへ鬼女に扮した東雲が命を狙って近寄って来ますが、助けに入った仁木喜代之助が悪魔退散の祈りをあげると鬼女は姿を消します。

清元には少ない時代物の代表曲の一つで、時代物らしい重厚さと変化の大きさを併せ持った曲です。

## 詞章

秋の夜の　隈なく照らす月影も　雲のさはりのほの暗く
黄昏「うきを助くるお地蔵様、お召なされし其のお笠を、暫くお貸し下さりませ」
光氏「おぉよい処へこころが付きしぞ。」（合方）
光氏「そちが申せし野中の寺とは此なるか、予がおとなうて見ん　頼まう頼まう」
真念「そこへ来たのは誰ぢゃ誰ぢゃな」
光氏「某事は宿願あって、今熊野へ参詣の帰るさ、行きくれて雨に逢ひ、足弱の妹を連れ、甚だ難渋仕る、一夜のやどり御無心申す。」
真念「おぉそれはさぞかしお困りぢゃろう、見れば二人共跣足の様子、其墓手桶に水があれば足を洗うて上らっしゃれ」
光氏「然らば詞に随うて」
黄昏「どれ、おすすぎを取りませう」
深き契りを汲みて知る、洗うて清き恋心
真念「扨お客人、見らるる通りの此荒寺、秋になっても藪蚊が多く、いやもういぶしがなうては、イヤモ、片時も辛抱が



なりませぬ、そこでな愚僧は、つい一走り檀家へ行て、枯れ木を貰うて来まする間、甚だ失礼ではござるが暫く留守をお頼み申しまする・・・おぉ秋の習いとは云いながら、いつの間にやら雨もすっかり上がった様子、おぉそれに今宵は丁度満月、お客人それあの天上の破れ目からこの縁へ、イヤモ、一杯にさし込んで寝ながらに見る秋の月、ここらあたりは愚僧が自慢の処ぢゃアハハハ・・・ではちょっと一走り行って参りましょう。どうぞ暫くご辛抱下され。ヤレヤレえらい蚊ぢゃえらい蚊ぢゃと、まずこうしておいて後をあけ渡すのが功徳というもの　何ぢゃ、兄妹ぢゃ、ウフ、兄妹と言うては居れど、どうやら二人は女夫連れ」
両人「エェ」
黄昏「いや何見おとりのないよい兄妹ぢゃナァ」
小首かたむけ　そそり節　仇人は狐狸かしら化の、あんな兄妹唐にもあろか、人もあらうにこの名僧を　はめていなして
しっぽりと　もしやきゃつなら眉につば、エェ畜生めと　枯柴の　いぶし求めに急ぎ行く
なまいだ　なまいだ　なまいだ　なまいだ
黄昏「誰が唱うるかあの唱名、気味が悪うございまするな」
光氏「去りとては気のよわい、何も怖るる事はないぞや」
いたわり給ふ御情け　悲しいわいなと泣き沈む　折からあなたに怪しの音
黄昏「アレー」
光氏「こりゃ黄昏、こころが付きしか、光氏ぢゃ、もうよいもうよい、早九つに間もなきに、アノ伴僧ナ如何せしか、帰りの遅い事ぢゃナ」
案じる折から吹きおくる、夜風と共に鳴動し　三つの車に法の道、火宅の門や出でぬらん　めぐるむくひを思ひ知れと打ってかかれば疾くよりも、うかごふ修験の仮出立、かけ入り中を押隔て
喜代之助「ハハー、君には是に渡らせ給ふか、如何にも怪しき鬼女が振舞、イデイデ障碍を祓ひ申さん」
いでいで加持を　なすべきと数珠押揉んで立ち向ふ　（合方）
鬼女は怒りの形相にて懐剣ひらりと抜きかざせば　女はあり合ふ菅笠おっとり　ささへとどむる争ひも　今ぞ心の角折れて、悪鬼の姿ぞ失せにけり

# 掛合

## 長唄・三曲　新松竹梅（しんしょうちくばい）

長唄　唄　杵屋吉之亟
　　杵屋佐喜
三味線　杵屋佐吉
　　杵屋浅吉
三曲　箏　萩岡松韻
　　渡辺岡華
　　萩岡由子
三弦　萩岡未貴
尺八　青木彰時

**杵屋吉之亟**（きねや きちのじょう）
昭和二十五年生まれ。曾祖母杵屋六理永（十三世杵屋六左衛門・のち寒玉夫人）に手ほどきを受け、六歳で初舞台。父杵屋喜三郎、祖父杵屋六左衛門に師事。（一社）長唄協会理事。

**杵屋佐吉**（きねや さきち）
昭和二十八年、五世杵屋佐吉の次男として東京に生まれる。四十六年、曾祖母の名を継ぎ佐喜を名乗る。平成五年、佐門会家元七代目を襲名。（一社）長唄協会常任理事、現代邦楽作曲家連盟同人、樂明會同人。長唄佐門会 家元 七代目。

**萩岡松韻**（はぎおか しょういん）
昭和三十七年五歳で初舞台、祖父二世萩岡松韻より手ほどきを受ける。昭和四十五年中能島慶子師に入門。昭和五十五年四代目萩岡松韻継承、東京藝術大学邦楽科卒業。東京藝術大学教授、日本三曲協会常任理事、山田流箏曲協会副会長、萩岡會会長。

**青木彰時**（あおき あきとき）
昭和四十七年六歳より父二代青木鈴慕より手ほどきを受ける
昭和六十三年國學院大学経済学部卒業
平成四年地歌合奏を菊原初子・光治師に師事
日本三曲協会常任理事、琴古流協会常任理事、
東京藝術大学非常勤講師、洗足学園音楽大学非常勤講師



## 解説　新松竹梅（しんしょうちくばい）

明治元年に十二世杵屋六左衛門が箏曲の松竹梅を長唄に取り込み作曲したもので、他の松竹梅よりも新しいところから通常は新松竹梅と呼ばれている大曲です。箏曲松竹梅は大阪の三津橋勾当による作曲で、大阪十二曲の一つと言われる重要な曲となっており、曲名は松竹梅ですが歌詞は梅・松・竹の順で歌われます。この歌詞を取り入れて瀬川如皐が作詞したものと言われており、松竹梅や鶴亀を歌い込んだ祝儀曲で、更にこの曲が中村座と守田座の合併興行で使用されたことから終わりの部分は両座の弥栄を祝った歌詞となっています。本調子・大薩摩で始まり、二上り、一下り、本調子、二上りと調子が変わるとても変化に富んだ曲となっており、本日は箏曲の松竹梅から取り入れた歌詞の部分を箏曲で、他の部分を長唄で演奏致します。

## 詞章

（本調子・大薩摩）〽それ槿花一日の栄、二十余年年と時めきし、須磨の内裡も仇波に、夢路もさぞな入月の、跡さえ見えぬ磯山の、花の木蔭に旅居して、更け行く夜半ぞ物凄き　（鼓唄）〽峯の吹雪と散る花や、嵐烈しき景色かな　（二上り）〽立ち渡る、霞を空の知るべにて、長閑けき光り新玉の、春立つ今朝は足曳の、山だを分けて大伴の　（合三下り）〽南より笑ひ初む、薫りゆかしき梅が香を、待ちつけ顔の鶯や、法法華経の法の声、聞くに朗か春風の、富貴自在、初音を祝ふ琴の音に、通う調べの細やかに、（合本調子）〽君が代の、濁らで絶えぬ御溝水、末澄みけらし国民も、実に豊なる四つの海　〽千歳限れる常磐木も、今世のみなに引かれては、幾世かぎりも嵐吹く音、枝も栄ゆる若緑、生ひ立つ松に巣をくふ鶴の、久しき御代を祝ひ舞ふ（合一下り）竹の心のすなほなる、御代に青葉の生ひ茂るなエ　（合）〽松の齢の数多とせ、梅も八千代と根ざす目出度さ　（三下り）秋はなほ、月の景色も風情ある、梢々にさす影の、臥床に写る夕まぐれ、幾世の秋に限りなく、虫の声々さまざまに　〽広寒宮の音楽の、妙なる調べときめきて、返す返すも面白や　〽長き栄えも類ひなき、松と竹との末かけて、契りも深き相生の、栄えいてふや鶴と亀、守田津中むら繁栄は、両座の梅の花櫓、声も揃うていさぎよく、松竹梅とぞ祝しける。

本日のナビゲーター

## 葛西聖司（かさい せいじ）

アナウンサー・吉典芸能解説者。
一九五一年東京都生まれ、中央大学法学部卒業。ＮＨＫエグゼクティブアナウンサーとしてテレビ、ラジオのさまざまな番組を担当してきた。現在はその経験を生かし、歌舞伎など古典芸能の解説や講演、また日本伝統文化の講義などで大学の教壇にも立ち、朗読教室や執筆活動も続けている。

**主な著書**

『名セリフの力』（展望社）
『ことばの切っ先』（小学館）
『文楽のツボ』（日本放送出版協会）
『能楽入門２ 能の匠たち』（共著、小学館）
『能狂言なんでも質問箱』（共著、松書店）
共書『歌謡曲の力―アナウンサーふたり口ずさみ語る―』（展望社）

## 邦楽連合会（事務局　日本三曲協会内）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一般社団法人 義太夫協会 | 事務局 | 電話 03-3541-5471 | http://www.gidayu.or.jp |
| 清 元 協 会 | 事務連絡所 | 電話 03-3739-6765 | http://www.kiyomoto.org/ |
| 一般財団法人 古曲会 | | 電話 03-3431-3336 | |
| 新 内 協 会 | | 電話 03-3260-1804 | |
| 常 磐 津 協 会 | 事務局 | 電話 03-3636-2220 | http://www.tokiwazu.jp/ |
| 一般社団法人 長唄協会 | 事務局 | 電話 03-3542-6564 | http://www.nagauta.or.jp/ |
| 公益社団法人 日本三曲協会 | 事務局 | 電話 03-3585-9916 | http://www.sankyoku.jp/ |

**平成28年の邦楽演奏会は3月5日(土)を予定いたしております。**

本プログラムの詞章は実際に演奏される部分のみの掲載となっております。
全曲分の歌詞をお知りになりたい方は、それぞれの協会までお問い合わせ下さい。